

# 津輕の滄海の

(昭和十三年寮歌)

二階堂孝一君 作歌

高橋寛君 作曲

一

津輕の滄海の渦潮わけて  
雄大き想ひを北斗に馳する  
若き情懷は北溟の自然に  
抱擁かれて今野心培ふ

二

アカシヤの白花散り敷く夕べ  
白銀の月仄かに浮ぶ  
牧場添ひの野路逍遙ひゆけば  
羊の群は声なく去りぬ

三

石狩の平野に爽夏訪れて  
原始の大森は緑影も小暗し  
郭公の朗声静寂に徹り  
清涼しき朝の熟睡を破る

四

豊穰の秋の讃歌を奏で  
ポプラの高梢さやかに揺ぐ  
北溟の蒼穹紺碧に透き  
生の歡喜我が胸懷に充溢つ

五

飄々の風声疎林に沈潜み  
無眼の静寂天地に充滿てり  
寒月は鋭利く虚空を截りて  
我が行く孤影よ霜に凍りぬ

六

白銀の六華莊嚴に咲く  
山嶺奥深く彷徨れ行けば  
ああ壮麗の樹氷の森よ  
冬の神秘に我が胸戦慄ふ

七

さあれ戦塵東亜を閉鎖し  
全支の空に硝煙昏冥し  
大陸飛翔る荒鷲想へば  
雄心湧きて若き熱血滾る

八

先人の絢夢残れる原始林に  
寮祭の犠牲の火柱廻りて  
いざ寮友とちよ永久に謳歌はん  
意氣と血潮の三年の契り